「しま」は長崎県の宝!!

シリーズ４～五島市～

長崎県は、全国で最も多くの「しま」を有する県です。それぞれの「しま」には、その土地にしかない、美しい自然、豊かな歴史、そして温かい人々の営みがあります。長崎県の宝である「しま」のことを知り、思いを馳せることを県民の一人として大切にし、「しま」とのつながりも含めて、私たちの長崎県があることを誇りにしたいものです。

シリーズ４は五島市にスポットを当てました。五島列島南部の五島市は、美しい海、きれいな火山、真っ白な砂浜に特徴的な溶岩海岸など自然の見どころがたくさんあります。遣唐使船の停泊地、倭寇の拠点、潜伏キリシタンが暮らした場所など、九州の西に位置することが背景となった多様な歴史に触れることができます。

＜五島市の位置＞

【豊かな自然と歴史】

＜魚津ヶ崎公園＞
魚津ヶ崎は、遣唐使船日本最後の寄泊地として「肥前風土記」にも記載されています。公園には、これを記す石碑が建てられています。

＜久賀島のツバキ原始林／県指定天然記念物＞
久賀島南岸斜面の椿は、現在に至るまで開発されることなく、大切に保護されてきました。その実は椿油として活用されることで、住民の暮らしとも深く関わっています。

＜江上天主堂／国指定有形文化財＞
江戸時代に弾圧から逃れて外海地域から移住した人たちが住む集落に建っています。この教会を含む江上集落は、キリシタン「潜伏」の終わりを示すものとして、世界文化遺産の構成資産の一つとなっています。

＜柏の辞本涯＞
第 16 次遣唐使船で唐に渡った空海と、この地の関わりを記す記念碑です。碑に刻まれている「辞本涯」とは、空海の書物に記された言葉で、「日本の最果ての地を去る」という意味です。

＜堂崎教会＞
五島で初めて建てられた、赤レンガ、ゴシック様式の洋風建築物です。1880 年（明治 13 年）、マルマン神父が仮聖堂を建立し、後のペリュー神父によって 1908 年（明治 41 年）、現在の教会に建て替えられました。内部は木造で、色ガラス窓やコーモリ天井が取り入れられ、イタリアからも資材が運ばれたと言われています。

＜大瀬崎断崖＞
高さ約70 mの断崖絶壁であり、五島列島の大地をなす砂泥互層がみられます。その上に立つ白亜の灯台は、福江島西端の案内役です。
ここでは五島列島・平戸・済州島でしかみられないシマシャジンという花が分布しています。また、大型のタカであるハチクマが大陸にわたる際の経由地となっています。

＜勘次ヶ城跡（山崎の石塁）／県指定史跡＞
砦状の遺構で、迷路のような石積みが巡らされています。大工の勘次がカッパとともに溶岩の石を使ってつくったという伝説が残っています。この一帯は、松浦党の豪族田尾氏の所領であったことから、田尾氏の砦ではないか、周辺から明銭が出土したことから、倭寇の根拠地であったのではないかなどの説があり、何の遺構かは確定していません。

＜鬼岳＞
福江地域の台地は、ハワイと同じタイプの溶岩によりできています。鬼岳はこの地域に11ある火山の中で最も新しいものです。山は芝生で覆われ、草原環境維持のため、3年に1回野焼きがおこなわれています。

【五島の伝統産業 椿油】

五島では、ヤブツバキが自生しており、昔は集落ごとに椿油を生産してきました。

椿油の歴史は古く、遣唐使が唐の皇帝に献上した品の一つに椿油がありました。このことからも、椿油が当時大変珍重されていたことがうかがえます。平安時代の法令集には、椿油を壱岐国の租税品とした記録が残されています。

椿油は、化粧品や薬品に利用されるほか、食用として炒め物やドレッシングに用いるなど、幅広く利用されています。

主な都道府県の椿油の生産量
（令和元年度）

都道府県	生産量(kl)
長崎県	26.8
東京都	11.8
山口県	1.0
岩手県	0.4
福井県	0.2
その他	0.1
合計	40.3

特用林産物生産統計調査
（農林水産省）

長崎県における椿油の
地域別生産量（令和元年度）

長崎県	生産量(kl)
県央	-
県北	0.0
島原	3.0
五島	23.8※
壱岐	-
対馬	0.0

※内訳　五島市　16.6kl
新上五島町　7.2kl

令和元年度長崎県の森林・林業統計
（県林政課）

今では、椿油を生産する工程で機械を使用していますが、伝統的な製法を大切に守っている製油所もあります。令和元年度の長崎県の椿油の生産量は全国１位で、中でも五島市は、全国の椿油の約４割を生産する日本有数の椿油の生産地となっています。

椿油は、オリーブオイル、ホホバオイルと並んで世界３大オイルに数えられています。この椿油は、髪や肌のうるおいを保つ効果に優れており、健康にも良いオレイン酸が豊富に含まれていることから、五島の椿油が、大手化粧品会社のシャンプーの原材料として採用されるようになりました。

さらに、椿油の他に、椿酵母など椿を使った商品等を開発、販売する企業が設立され、五島の椿は広がりを見せています。

【日本遺産「国境の島」　五島の魅力】

７～８世紀、中国の進んだ制度や文化を学ぶために派遣された遣唐使船は、五島を日本で最後の寄港地としていました。真言宗を開いた空海、天台宗を開いた最澄も、遣唐使船に乗って五島から唐へ渡り、最新の仏教を学んで帰国しました。そのため、五島の各地には遣唐使ゆかりの史跡や伝説が残されています。遣唐使ゆかりの地である五島市には、日本遺産「『国境の島』壱岐・対馬・五島～古代からの架け橋～」の構成文化財が四つあります。

A　三井楽（みみらくのしま）
遣唐使船の日本最後の寄港地となった場所です

B　ともづな石
遣唐使たちが港に入った際、とも綱を結わえた石と言われています。現在でも地元の人々の手によって、大切に守られています。

C　明星院本堂
五島で最も古い寺で、唐からの帰りにこの寺にこもった空海が、明星庵と名付けたと伝えられています。

D　大宝寺
806年に遣唐使とともに中国に渡った空海が、中国から帰る際に滞在した寺院です。

画像提供：五島市観光協会、五島市、九州大学　清川昌一氏